

# FIFA U17 ワールドカップ (UAE) 視察報告

報告者：池谷 孝（清水エスパルス）

期日：2013.10. 23-30

場所：UAE (DUBAI, SHARJH, AL AIN CITY, RAS AL-KHAIMH, ABU DHABI)

研修：全体研修(午前 2 時間/毎日)、視察(午後～深夜)

目的：U17 ワールドカップのゲーム及びディスカッション研修を通してクラブの育成の知識やコンセプトをさらに積み重ねる

視察対象：予選リーグおよびラウンド 16 の 10 ゲーム

報告対象者：J リーグ、エスパルス関係者および静岡県種別指導者



## 視察ゲーム

### ◆予選リーグ

□10/23(水)[Ras Al-Khaimah 気温 30℃・湿度 57%]

#### イタリア (1-2) ウルグアイ

▶CF の 9 番をターゲットにしたイタリアのサッカー。体格に優る 9 番は存在感を示したが他の攻撃のオプションがなく 7 人で守り 4 人で攻める単調なサッカーに終始した。1 対 1 で突破されることが少なく 1 対 1 の対敵守備の強さはあったが、全体的にボール扱いの技術も高いとは言えなかった。対するウルグアイはボール扱いで優位に立ち、8 番の DF ラインの裏を衝く動きが効果的であった。守備に関してはプレッシャーの緩さを感じた。

#### ブラジル (3-0) ホンジュラス

▶ブラジルはボールの出し手主体のサッカーであったが、受け手のタイミングに合わせてパスを出せる技術と自分で相手を突破する技術を兼ね備えており、バランスよく攻撃できていた。常にボールを支配しゲームの主導権を握っていた。ホンジュラスは格上のブラジル

を怖がらずプレーできていたがフィールド 10 人の体格やクオリティにばらつきがあり、奪った後のプランやプレーの選択肢にも乏しく、サイドの 9 番がボールを持った時くらいしかチャンスを作れなかった。

□10/24(木)[Sharjah 32℃・66%]

#### 日本 (2-1) チュニジア

▶両者ともメンバーを落としたこともあり前半は技術、走りに欠け内容の薄いものであった。日本は落ち着いてパスを回すことができたが、タイミング良くスピーディにボールを受ける動きに欠けチャンスを作れなかった。後半水谷が入ることによって攻撃のテンポが上がり勝利を得た。

#### モロッコ (4-2) パナマ

▶モロッコは個人のポジション適性やポテンシャルの高さを感じさせた。攻撃のコンビネーションやバリエーションに富み、ゴールに向かうプレーはストレスを感じさせなかった。守備でも奪われた直後の守備への集中が高く、このゲームはバランスと完成度の高い大人のサッカーであった。パナマも臆することなくプレーし、集中を切らさず良く走りプレーし続けた。体格の個々の差はばらつきがあったが技術も高く、淡々とモロッコのサッカーにくらいついた姿は可能性を感じた。ただ、ヨーロッパの主要チームの育成組織でプレーするモロッコ選手とのゲーム環境の差は感じた。

□10/25(金)[Al Ain City 33℃・55%]

#### メキシコ (1-0) スウェーデン

▶個人技をチームに生かすメキシコであったが、「メキシコ」という私のイメージほど個人技があるとは言えないゲームであった。チームプレーというよりボール保持者と受け手 2 人の関係性で成り立つ攻撃であり、3 人目の関わりは薄かった。対敵プレーはタフでありコンタクトプレーに長けている。対するスウェーデンは、4:4:2 の 3 列のラインが保たれチームの意志は感じ、個人技術やカウンター以外の攻撃のオプションに乏しく中盤を作れないサッカーであった。2 人で攻め 9 人で守るスタイルは退屈なサッカーと感じた。

#### オーストリア (0-1) イラン

▶オーストリアは MF の 8 番 6 番が中心となって攻撃をリードした。しかしながらラストパスの精度に欠け有効なシュートを打てなかった。DF の技術的なミスもあったが空中戦には強い。イランは FW の 9 番 19 番に走力、技術があり、MF10 番のパスから良くチャンスを作った。両者とも攻守の入れ替わりの激しい縦板に水的なサッカーに終始した。アグレッシブで見ごたえのあるゲームとなったが、両者にゲームを読みながら中盤で時間を作り効果的効率的にサッカーをする意図があればもう少し近代的な内容のゲームができた気がする。勝ちたいという一心がこういう内容のサッカーさせたのだと思う。それが最も大切なメンタリティであるのだが。技術とメンタリティの関わりを強く感じたゲームであった。

### ◆ラウンド 16

□10/28(月)[Sharjah 31℃・58%]

#### 日本(1-2) スウェーデン

▶ゲーム開始から、2 トップを含め 3 列のラインで守備固めをしたスウェーデンであった。カウンター数回で 2 点を奪ったことはプラン通りであったと思われるが、観ている方とし

ではもう少し攻撃にやる気がほしかった。スウェーデンにとって、勝利とスタイル、代表に向かう育成のバランスをどうとるのだろうかという疑問がわく。スタイルという意味では10ゲームの中で最も明確であった気はするが。しかしながらベスト4まで勝ち上がったことを考えると実力があつたということか。U20以降のスウェーデンを見てみたい。

日本は、スペースでパスを受ける動きはできていたが出し手と受け手のタイミングが微妙にずれてシュートまで持ち込めない状況が続いた。ポゼッション率は75%と高かったが、選手がゲームを読んで自主的に変えていくオプションと、サイドアタッカーや存在感を持つCFのオプションの両者がなかったためパターン化した攻撃で相手を崩せなかった。あのシュートが決まっていればという場面もあつたが、他のゲームと同様、リアリティあるシュートトレーニングが足りない印象を受けた。

### ホンジュラス (1-0) ウズベキスタン

▶体格がよくバランスの良いサッカーをするウズベキスタンであつたが決め手を持った選手の個性が見当たらない。ホンジュラスは9番をトップに持ってきて個人技を生かしたサッカーをした。

□10/29(火)[Ras Al Khimah & Dubai 30℃・72%]

### ウルグアイ (4-2) スロバキア

▶前半しか見なかったが、ウルグアイ選手のボールを守る技術、前に向かう意志はインパクトがあつた。トップに入れるまでの崩しは単調だった。

### アルゼンチン (3-1) チュニジア

▶両者とも個の強さが光ったゲーム。アルゼンチンのボールに対する責任感が感じられた。集中力があり空中戦や人に強いサッカーであつた。しかし、ボール保持者主体のサッカーで味方の関わりが強いとは言えずパスの精度もやや足りなかつた。チュニジアも個人が強く、戦う気持ちが伝わるサッカーであつたが、局面的なサッカーでありパスを効果的につないでいく部分はまだ薄いと感じた。

**考察**…「良い問いとは、答えはあると思われるが容易に見つからないもの」

#### ■大会の全体的印象

ひょっとしたら、手を使うバスケットボールやハンドボールにより近づいた中盤省略のサッカー(奪えないから引いてブロックを作る)が見れるかと思ってUAEに来たが、勝ちたいという欲求の強さから直線的にゴールを目指す中盤省略のサッカーが結構あつた。

そういう意味で「ワールドカップらしいゲーム」もあつたが、「ワールドカップなのに…」というゲームもあつた。ブラジルのようなタフで機能的で美しいサッカーもあり、相手のサッカーを壊して勝つ守備的なサッカーもあつた。

しかし、どのチームにももはやボール技術のない選手は存在しなかつた。

#### ■技術について

- ▶ボールを最初のタッチで最良の場所に置く技術、パスを渡す技術に優れる。浮き球に対する体の使い方、コンタクトに慣れている。
- ▶ポジションの技術(ヘディング、突破、シュート、配球)
- ▶ボールを守る技術、味方に繋げる責任感の強さ

## ■メンタリティについて

「負けるとは、すべてを失う」という意味がある、という含蓄を研修中にある人から教えられた。宗教や言語まで変えられてしまった南米のいくつかの国々を例にとるまでもなく、歴史上、常に外部の侵略の脅威に晒されてきた（日本以外の）国々の人々の遺伝子に組み込まれた言葉だと私は理解した。

メンタリティという、精神や感情や気持ち、心などを示すであろう言葉はそもそも欧米と日本ではその解釈や使われ方が異なると思われるし、共通項を見出すのも簡単ではないと思う。サッカーの育成現場でも扱いがつくづく厄介なものだと私は思う。彼らの生まれ持った勝利のメンタリティ、白線を越えたら人格をも変えて走り、戦うメンタリティ、ゲームを読む冷徹なメンタリティなどが、先天的なものなのか後天的に植え付けられてきたものか私自身はよくわからないが、日本人の場合、一般的な言い方をすれば、付け焼刃的方法では、選手自身が身につけることも指導者が植え付けることもできないと感じる。

概して個人主義的な気質に薄く、集団行動に違和感を持たずコレクティブなことが得意な日本の子どもに、サッカーゲームに必要なメンタリティを育てるにはどうしたらよいのだろうか？負けず嫌いな子どもを育てるにはどうしたらよいのだろうか？逆境にあっても冷静果敢な思考ができる子どもをどう育てたらいいのだろうか？指導者が詰めて熟考しなければならぬことだと感じる。

子どもの時から、ものごとの「考え方」を明確にさせ自主性を持たせることはその一助になるのかも知れない。

トレーニングでは「技術のレベル」を変えていくと同時に「意識のレベル」を変えていく指導が必要であると考えます。

## ■戦術について

4 : 2 : 3 : 1 もしくはその変形が主たるシステムであった。スウェーデンの4 : 4 : 2 の3ラインは特別な印象を受けた。多くのチームの戦術はシンプルで2人の関係性で攻めるプレーが多く見られ、守備は前線からのプレッシャーを掛けるチームもあったがブロックを作って守備をしていた。日本の規律あるパスのチームワークはさまざまな意味において異彩を放っていたといえる。

## ■育成について…多様な考えや取り組みがあるが、見つけて育ててチームにするのは同じ

出場国が、U17大会をU20、U23オリンピック、フル代表と一貫したステップアップの育成の起点と考えているのか否かはよくわからなかった。ゲームを見る限りそれぞれの温度差を感じた。ゲーム内容も、各ポジションに配置した個のポテンシャルをリスペクトしたサッカーが主流だったように感じる分、チームワークという言葉からは遠かったように思う。選手個々のポテンシャルを見極め生かしながら少しずつチームワークの枠にはめていく微妙な年代かとも感じた。

少々乱暴で意味もないが、観戦した各国を「個」型と「チーム」型に分けるとするならば、アルゼンチン、チュニジア、ウルグアイ、ホンジュラス、イタリア、イラン、オーストリア、メキシコは前者であると思う。ブラジル、モロッコなどは個々の選手の判断力がありチームとしてのサッカーも機能していたが、個のうまさ強さが基盤であることに変わりはないように思う。ウズベキスタンはどちらともいえず中途半端な感じを受けた。スウェーデンは守備的なチームコンセプトがあり守備ではチームワークの範疇に入るのかもしれない。日本は明らかに個ではなくチームプレーで突出していたように感じる。

10 試合のゲームを見て、野生の暴れ馬を集めて調教し競技に出す指導者の姿が思い浮か

んだ。これは育成過程に対する日本との温度差や違いを感じたともいえる。日本が積み上げ格的に（チームワーク主体に）を徐々に育てていくのに対し、主要国では18歳19歳ころからリーグの環境が熾烈になり、またプロとしてのコレクティブなサッカーにもなっていくのでそこまで育てられた（潰されなかった）個のポテンシャルが加速度的に一気に噴き出してくるのではないだろうか。ユース年代後半からプロ初期のリーグ戦環境の意味は大きいと感ずる。

そういう意味でもU20の大会を見てみる必要があると痛感した。

### ■日本代表についての印象

現地では2ゲーム見ただけなのでディテールは不明だが、日本人のストロングポイントと言われる技術、俊敏性をもった選手をそろえ、体格は劣るが出し手受け手のボール技術の高さと関係性、タイミング、スペースを使った攻撃は有効に機能していた。スタイルがあったと言える。ただ、選手はチームの規律には忠実だが、個々がゲームを読み、規律を超えてプレーを変えていく柔軟性の少なさとサイドアタッカーとCFというオーソドックスなオプションがないので攻撃が手詰まりになってしまう、パスのみの突破なのでチャンスを作るための変化を起こせないという課題が出ていた。

結果をみる限り、勝ち進むには体格やフィジカルに優る相手を凌駕する個々の技術力、決定力および走力やチーム戦術に限界があったと感じてしまう。そして、技術と小回りの良さ、俊敏性という日本人の特性を生かしたパスサッカーの方向性は示せたが、オリンピックやフル代表につながるポテンシャルを持った個の発掘やその経験値を上げることにつながったかどうかは、次のU20の代表にどれだけ残るかでその評価が出るように思う。

クラブ訪問したAL WASLで元バルサのコーチが話してくれた「バルサのサッカーがポゼッションサッカーというのは誤解だ。バルサはバイタルエリアでは選手が仕掛けて突破するサッカーだ」という言葉が耳に残る。

### ■水谷拓磨君(清水エスパルス)について

ゲームの途中に出て、確かなボール技術と小気味よいパスワークで、少し緩んだチームのサッカーに再び規律とテンポをもたらすことのできる貴重な戦力だった。ジュニア戦でも79分に出場し2-1の勝利に貢献した。リードされたスウェーデン戦に体調不良で出場できなかったことは日本代表にとっても悔やまれる。

**育成への提言**…よく育てよいサッカーをしよう

#### ◇「魅力あるサッカー」がサッカーの王道

観る人、ファンあつてのサッカー。ファンがいなければプロ選手とて草サッカーの選手に等しい。人々を魅了するサッカー、人々を魅了する選手のプレーや人柄が、サッカーを包括するすべてに影響を与えるように感じる。

#### ◇発掘…見つけなければならない

プロフェッショナル選手を輩出しようとするなら発掘しなければならない。発掘のシステム、人材が必要であり、同時に、社会の伝統やシステム(教育やチーム移籍)、あるいは人心を考慮したプロクラブの努力も必要であると思う。

#### ◇個々の選手のポテンシャルや可能性に寄り添った指導

個々の選手のポテンシャルを生かした指導とチーム作りがその後の選手の飛躍につながる。個性を見極め、潰さず伸ばす指導者の眼力や忍耐、教育力が必要であると思う。

大会があるために知らず知らずのうちに勝利やチーム戦術ばかりに目が行きがちな育成年代の指導者の哲学や自省や知識が必要であると思う。規律や戦術を先行させ型や枠にはめてサッカーをさせることは即効的な成果に結び付く場合があるが、育成年代の指導者の王道ではないように考える。

ジュニア、ジュニアユース、ユース年代を通して、個のうまさ強さのストロングポイントを生かした指導育成の視点に今一度戻るべきであると思う。これは、よい選手に育てれば勝ってしまうという視点でもある。また、手間がかかるが、指導者が選手ひとりひとりと向き合い、選手の目標、技術、気質、健康、生活などをケアする必要があると感じる。

#### ◇技術はすべての部屋に入るためのカギである

技術と観ることを一体化させ、選手に決断させる指導が求められる。15歳あたりまでにその選手に必要な技術をすべて習得させたい。

「技術のレベル」を向上させると等しく「意識のレベル」を向上させたい。

#### ◇止めて蹴って走る、これがサッカーの原点

ボール保持者の技術、受け手の技術がゲームの原点。ボールがない時に観ておく、自分の前にスペースを作る、ファーストタッチの置きどころ、コンタクトプレー、メッセージパス、さまざまなキックなど運動動作が自動化するまで練習させたい。

#### ◇「ゴールに向かう」「ボールに対する責任」

選手の、「ゴールに向かう」という姿勢をスポイルしない指導を忘れないでいたい。しかしボールに対する責任をも持たせる。「ボールに対する責任感」は最も基本的かつ究極のメンタリティだと思う。

「ブラジルサッカーが強いのはなぜかわかるか？それはチームの全員がボールに責任を持っているからだ」とリオのグラウンドで教えてくれたジーコの盟友、ジュリオ・セザールの言葉を思い出す。

#### ◇「あのシュートが決まっていれば」を「あのシュートが決まったから」にする指導

「ゴールの匂いを感じたら打て、打て、打て！」と言ったのはイブラヒモビッチだが、シュートのミスが少なくなかった大会だったように思う。奪ってから決定機を作りゴールを決めるのがサッカーの本質なら、バスケットのように1回の攻撃で1回のシュートを打つのが理想だろう。もちろん現実はいかないが一歩でも理想に向かうには、リアリティをもったシュートのトレーニング多く確保する必要があると考える。

#### ◇サッカーの最終命題は決定機を作ること

しっかり奪いより効果的に攻める。ポゼッションかカウンターかというスタイルや戦術の比較論ではない。

#### ◇守備

守備の人数を当てて下がってブロックを作っているが、ボールを奪うために守っているかは曖昧さが残る。自分のマークマンに責任を持ってボールを奪いに行く守備の姿は時

代によらず不変の基本であると確信する。

#### ◇攻守の切り替えの瞬間の意味

奪った瞬間、奪われた瞬間のプレーがサッカーのいくつかの究極のクオリティのひとつ。守備の背後に蹴るのか時間をかけて攻撃を作るのか、奪いに行くのか下がってブロックを作るのか、一瞬の判断がゲームの勝敗を左右する。

#### ◇毎日のトレーニングで M-T-M を、1 週間単位で M-T-M を

練習してゲームをする。間に分析を入れながら。繰り返し行い改善していく。

#### ◇選手のマネージメント、ケア

重要なゲームでミスをしてしまった育成年代の選手に対する大人のケアが必要。

#### ◇サッカーを作っているもの

基礎基本を押さえたサッカーの多様性と独自性。どちらも必要である。サッカーの敵は画一性。画一的なものはヒエラルキーを作り変化に弱い。地球の環境と生物の關係に似ているように私は思う。

#### ◇ユース年代からプロ初期年代でのリーグ環境の重要性

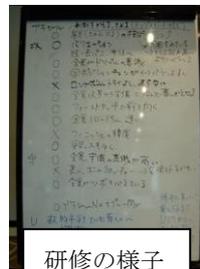
拮抗した熾烈なリーグ環境がそれまでの育成時代に培った技術が本物かどうかあぶり出す。また、大人のリーグ環境がメンタリティとともに選手のゲーム技術を伸ばす場でもあると思う。

#### ◇メソッド構築

クラブで日本人の特性、地域の U12 年代育成の特性などを吟味し見極め、生かしながら育成・指導のメソッドを構築し変革していく思考や人材が必要。

#### ◇指導内容について

- ▶ 最良のプレーをするために、ボールの移動中に観ておく、最初のタッチの置きどころ、強いパス柔らかいパス、意図をもったパス、そして走ること。それらをもっと効果的なプレーにするためのポジショニング、タイミングの指導
- ▶ 自分の前にスペースを作る技術とコンタクトプレーの技術の指導
- ▶ 現代の日本の選手はサッカーを教えられて育った子どもがほとんどだと思われるので、ストリートフットボールの要素(技術、競争心、メンタリティ)を小さいころのサッカーからトレーニングに入れる大人の配慮が必要ではないか。遊びのサッカーを技術に結び付ける指導が特に U12 年代の選手に必要に思う。
- ▶ 子どものサッカーはボールを持っている選手主体のサッカー、そこからボールの受け手を意識したスピーディなサッカーと融合させる。
- ▶ 子どもには状況判断が可能な状況(時間、スペース)でサッカーをさせる工夫が指導者に必要。
- ▶ ドリルとは「運動動作の習得」を意図する。動きの自動化、オートマチックな発揮を意図して。



研修の様子

